

## あとがき

クリストは現在活動している現代美術の作家のなかでもっとも重要かつエキサイティングな作家の1人である。このことはまず関係者の一致するところであろう。当画廊では1982年4月、クリスト展を開催したが、これはさまざまなプロジェクト10種類(ポン・ヌフを含む)が展示された。今回は2度目で、ポン・ヌフだけに限定してドローイング、コラージュ、写真等20点余を展示するものである。中原佑介さんのお話では今回のこの展覧会は世界で初めてのラップドポン・ヌフ展であるといわれる。クリスト夫妻を迎えて東京の当画廊で、この展覧会が開催できるのはいろんな意味を含めて、ぼくは大変うれしく思っている。

クリストが昨年5月、マイアミで「サラウンデッドアイランド」のプロジェクトを成功させたことは耳目に新しいところである。クリストは現在、4つのプロジェクトを実現に向け進行中である。ベルリンの「ライヒスターク」、ニューヨークのセントラルパークでの「ゲイト」アブダビの「マスタバ」そしてこのパリの「ポン・ヌフ」である。この4つのプロジェクトのうちもっとも実現可能性が間近なのはこのポン・ヌフで、すでにパリ市長シラク氏は了承を与えており、来年5~6月には実現が期待されている。ご存知のようにクリストは自分のプロジェクトを実現させるための巨額の費用を自分で調達する。すなわち自分が描いたドローイング、コラージュを売って資金を作る。スポンサーが出すのではない。このプロジェクト実現のために、ぼくはこの展覧会を営業的にもぜひ成功させたいと念じている。ポスターも作る所以である。

今回は中原佑介さんにカタログのテキストをお願いした。またニューヨークの柳正彦さんにアトリエでクリストとインタビュー(1983年11月19日)していただき、その記事を掲載することとした。このためカタログは大変ふくらみのあるものとなった。ともに厚く御礼申し上げる。また、カタログ作成に当っては貴重な写真をクリスト夫妻からお貸しいただい

た。その御厚意に対し感謝申し上げます。

最後にクリスト夫妻のわが国滞在が楽しいものであるようお祈りするとともに、クリストの今後のプロジェクトの成功を祈念して止まない。またこの展覧会開催についていろいろとご支援いただいた皆様に感謝の意を表する次第である。

1984年4月2日

佐 谷 画 廊

佐 谷 和 彦